

2022年7月に猿江公園でリュウキュウベニイトトンボという、本来は東京に分布しないトンボをたまたま見つけた（Vol.61参照）。このことをいつもお世話になっているアイザワさんに何気なく伝えたら、『東京のトンボ』の著者であるスダ先生にまで話が伝わり、「貴重な記録だから報文を出した方が良い」と助言をいただいた。

報文というのは、生物に関する新知見などの報告文で、プロの研究者でなくても投稿できる。むしろ、プロではなく趣味で観察・研究をしている人（“在野”の研究者と呼ぶ）の情報は、謎だらけの生き物たちの生態を明らかにする上で非常に重要と言われる。あのファーブルも在野の研究者で、昆虫の行動について数々の新発見をした。

というのは知っていたが、やっぱり素人にとっては専門誌に投稿するのは敷居が高い。というか、**まずどのレベルの「発見」が公表すべきネタなのかが分からない**。思い切って出したとしても、そんな当たり前なこと投稿すんなよ…と思われるんじゃないかと恐れていた。

でも今回は専門家に勧められたわけだし、良い経験だと思って、報文なるものを生まれて初めて書いてみた。ということで、『月刊むし』という昆虫の専門雑誌に報文を投稿し、突き返されるのではないかとビクビクしながらも、**無事4月号に掲載された**。

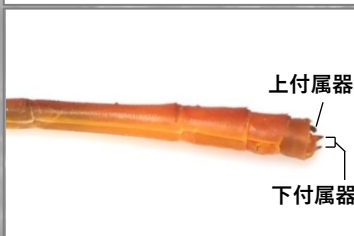
内容については正直言って、「外来種が新たな場所で見つかった」という地味なものだ。でも、こういった地味な知見が集積されて、生態系の一端を明らかにしたり、生物多様性の保全につながる。そして個人的には、学校のすぐ横の公園でも、世に報告すべき発見があると分かったことが大事だと思っている。生物班が行っている猿江公園の調査は、いずれきちんとまとめて報告するべきだろう。

ところで、『月刊むし』という名を出すと、「何そのマニアックな雑誌（笑）」とよく半笑いで言われる。生物の観察事例などを投稿できる超マニアックな雑誌は月刊むし以外にも様々あり、たとえば埼玉昆虫談話会が発行する『寄せ蛾記』や、膜翅目研究会（ハチの研究会）の『すがれおい』、東京蜘蛛談話会の『KISHIDAIA』などなど、地域ごとや生物の分類群ごとにさまざまな研究会誌がある。



発見場所（矢印）

猿江公園南部の上池のふちに張られたクモの巣に引っかかっていた。手も届かないし最初は素通りしたが、思いとどまって引き返し、棒を使って何とか捕まえた。引き返してよかったと心から思った。



全身（上）と尾部拡大（下）

近縁種と見分けるには尾部先端が重要。「上付属器」と「下付属器」がベニイトトンボでは同程度の長さだが、リュウキュウベニイトトンボでは写真のように下付属器の方が長くなる。また、リュウキュウベニイトトンボは眼が黄緑色。



昆虫専門誌『月刊むし』（4月号）

虫のみを扱う超マニアック!?な月刊誌。右の枠で囲った部分が今回のリュウキュウベニイトトンボについて。

## 報文を出してみた①

## 報文ってどうやって出すの？

# 江東区初のイトトンボの記録



猿江恩賜公園産リュウキュウベニイトトンボ♂ 2022.7.20

名の通り、本来は南方系（九州以南）のイトトンボだが、最近日本の各地での移入が注目されている。東京都ではこれまでに2区2市（新宿区、杉並区、あきる野市、三鷹市）から記録がある。ホテイアオイ等の水草に卵が入っていて、人間が偶然運んでしまった可能性が考えられている。

### ベニイトトンボ♂

水元公園 2024年9月  
こちらがリュウキュウではない方の『ベニイトトンボ』。からだだけでなく眼まで紅色。なお、こちらは猿江公園では見つからない。



### アジイトトンボ未成熟♀

水元公園 2024年9月  
アジイトトンボは青いトンボだが、成熟する前のメスは赤くて、一瞬ベニイトトンボかと見間違えることがある。

